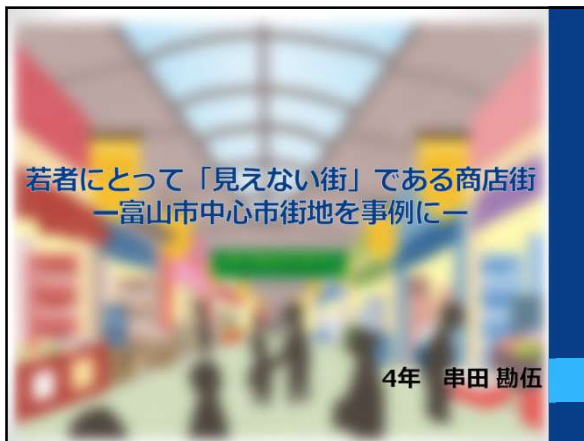




1

目次

- I はじめに
- II 調査地及び対象
- III 商店街の利用実態
- IV パブリックイメージ
- V おわりに

2

I はじめに①

・問題の所在

近年では中心市街地の空洞化が国・地方が抱える重要な課題の一つに

・モータリゼーションの意識の浸透
・スプロール現象

↓

中心市街地の衰退
商店街を取り巻く現状は更に深刻に

中心市街地の空洞化を防ぐため、一部の自治体(富山市も同様)は中心市街地への若者の中心市街地・商店街への来街促進に取り組んでいる。

様々な取組が行われる一方で、若者にとっての「商店街」の位置付けについて実証的なデータを示した調査が多いとはいえない。

空洞化

年	空き店舗率 (%)
2000	8.53
2003	7.31
2006	8.98
2009	10.82
2012	14.62
2015	13.17

3

I はじめに②

<商店街研究>

- ・1970年までの商店街に関する研究は、商店街の店舗構成を分析し、その空間的な構造を解明した研究が多い(杉村(1956)や松沢(1965)など)。
- ・社会経済構造が大きく変化した70年代以降の商店街研究は多様化し、立体的な視点や経営者意識といった要素を加味し商店街の構造を検討する。(戸所(1983)や安倉(1988)など)
- ・研究が多様化したとはいえ、商店街の構造について空間的な分析を加える研究が主体。商店街を利用する側の商店街の認知のされ方について検討した研究は少ない。

<メンタルマップ研究>

- ・リンチ,K(1968)は5つのエレメントを用いて都市のイメージを描き表すことや長時間にも及ぶインタビュー調査により、人々のもつ認知地図の違いを明らかにした。
- ・中村(1993)は、名古屋という同じ街でも、中心をもって見えてくる「見える街」と反対に像としては不鮮明な「見えない街」のふたつの側面を持っていることを説明した。

4

I はじめに③

- ・商店街研究はその構造分析が主体であり、利用する側からの商店街の認知のされ方についての関心が少ない。
- ・その認知のされ方についてメンタルマップ研究という研究手法を用いて、検討する。

↓

<研究目的>

- ①商店街に近い「富山外国語専門学校」と離れている「富山大学」を比較・検討し、学校の立地が学生の中心市街地の認知における差異を生み出しているのかを明らかにする。
- ②学生が中心市街地に対して共有するイメージを、実証的なデータをもって明らかにする。

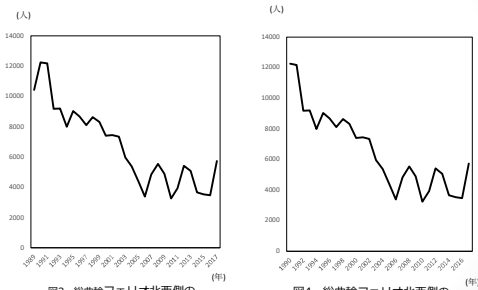
5

II 調査対象①

図2 調査対象地及び対象となる高等教育機関

6

Ⅱ 調査対象②



（図3・図4共に、『平成29年度富山市歩行者通行量調査報告書概要版』より作成。）

7

中村ほか(1993)が指摘する「**見えない街**」は富山市中心市街地における中心商店街が該当するのではないかと推測。



富山市は若者・学生の中心商店街への来街促進するべく高等教育機関の積極的な設置を試みている。しかし若者にとって商店街はメジャーな目的地として設定されているとはいえない。

それは中心市街地に立地する高等教育機関に通う学生にとって中心市街地、延いては総曲輪通り商店街や中央通り商店街といった中心商店街が「**見えない街**」として認識されているのではないか？

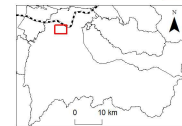
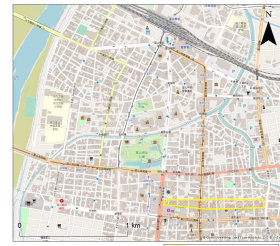


図5 富山市中心市街地概観

8

研究手法



- ・ 第一段階調査：アンケート及び手描き地図調査
＜アンケート＞

中心商店街への来訪経験やその頻度・目的
訪れる時間帯、通うようになったきっかけ
通学手段、商店街に通わない理由 等を問う。

- ＜手描き地図＞

描画範囲は中心商店街（総曲輪通り・中央通り）

- ・ 第二段階調査：インタビュー調査
＜インタビュー＞

第一段階調査を基に、商店街における個人体験を問う。
個人の経験にフォーカスした、より質的な聞き取り調査。

9

Ⅲ 商店街の利用実態①

2018年8月～10月 富山大学で第一段階調査

10月中 富山大学で第二段階調査

9月21日 富山外国語専門学校で全校生徒に一斉第一段階調査

10月中 富山外国語専門学校で第二段階調査

表1 各調査において分析の対象とした回答者数 (人)

	富山大学	富山外国語専門学校
調査対象者	50	89
アンケート調査	49	85
手書き地図調査	43	78
インタビュー調査	5	7

10

Ⅲ 商店街の利用実態②

表2 回答者の通学手段と商店街へ通う頻度 (%)

	学校名	
	富大 (n=49)	外専 (n=85)
通学手段		
自家用車	16.3	17.6
徒歩	36.7	10.6
電車	14.3	38.8
その他	32.7	32.9
商店街へ訪れる頻度		
毎週一回以上	10.2	15.3
毎月一回以上	34.7	38.8
半年に一回以上	24.5	12.9
ほとんど利用しない	30.6	32.9

表3 回答者の商店街へ通い始めた時期 (%)

	学校名	
	富大 (n=34)	外専 (n=56)
通い始めた時期		
高校へ入学する前から	11.8	8.9
高校に入学してから	11.8	5.4
大学・専門学校に入学してから	76.5	85.7

※商店街に訪れると回答した学生も、ほとんどの目的が大和富山店のみで、商店街の内側に訪れる者は少数派であった。

11

Ⅲ 商店街の利用実態③

表4 商店街へ通わないと答えた理由 (%)

	学校名	
	富大 (n=15)	外専 (n=28)
商店街へ通わない理由		
店員とのコミュニケーションが面倒	6.7	0.0
外からでは内観が分からない	13.3	10.7
品揃えが少ない	13.3	7.1
魅力ある商品が少ない	33.3	17.9
価格が高い	20.0	14.3
駐車場が有料だから	26.7	3.6
その他	66.7	67.9

「その他」の自由記述欄や聞き取り調査で挙げられた理由

- ・ 特に用事がないから
- ・ よく知らないから
- ・ 興味がある店がないから
- ・ 行く目的がないから

12

Ⅲ 商店街の利用実態④

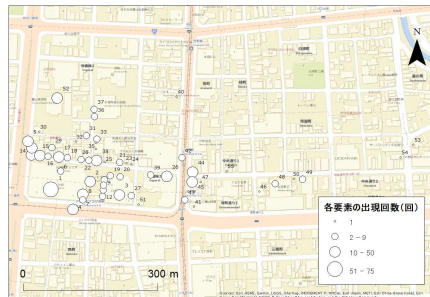


図6 各要素の出現回数（富山外国語専門学校）

13

Ⅲ 商店街の利用実態⑤

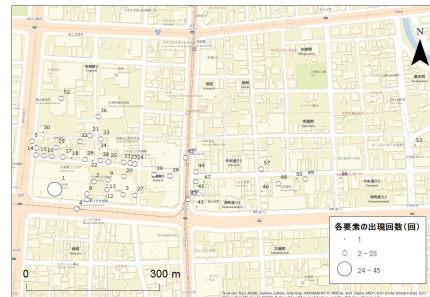


図7 各要素の出現回数（富山大学）

14

Ⅲ 商店街の利用実態⑥

表9 要素の種類別割合

	商業施設	飲食店	居酒屋	服屋	小売店	交通関係	その他	総要素数
富大	45 (16.85%)	74 (27.72%)	17 (6.37%)	8 (3.00%)	35 (13.11%)	42 (15.73%)	46 (17.23%)	267
外専	82 (17.52%)	178 (38.03%)	13 (2.78%)	8 (1.71%)	69 (14.74%)	54 (11.54%)	64 (16.68%)	468

※カイニ乗検定を行った結果、有意水準0.05で、有意という結果であった。

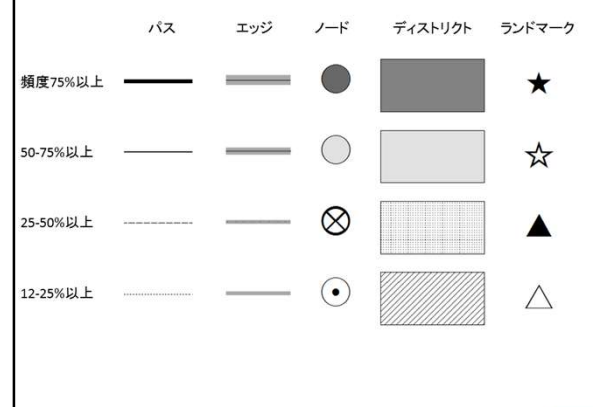
調査全体を総合的に評価すると・・・

富山外国語専門学校：文房具・日用品の購入場所
富山大学：居酒屋でお酒を嗜む、宴会を行う場所

として、商店街を捉えている傾向が見られる。



15



16

Ⅳ パブリックイメージ①

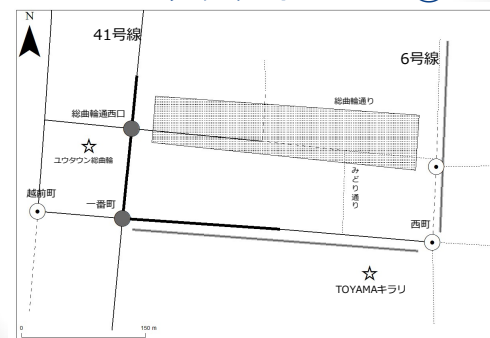


図8 富山外国語専門学校のパブリックイメージ

17

Ⅳ パブリックイメージ②

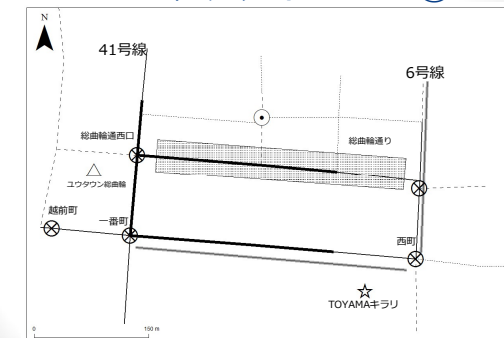


図9 富山大学のパブリックイメージ

18

V おわりに



【「趣味嗜好」>「距離」】

- 学校から中心商店街への距離が近いからといって、その地域のメンタルマップが明瞭になるというわけではないことが示された。商店街を訪れる際は、「距離」ではなく、「個人の趣味嗜好」が起因していることが明らかになった。学校が商店街に近くとも、学生の趣味嗜好によっては商店街を認識せず、他方遠くても来街する学生もいる。個人の趣味嗜好で来街頻度が異なってくる。
- 単純に、街中に学校を設置するだけでは、若者の来街促進を見込めない。そもそも商店街に若者を呼ぶことが得策なのかを、商店街側とも議論を重ね、吟味していくことが必要である。

19

参考文献・資料

- 杉村暢二 1956. 中心商店街における店舗の構成と配置. 地理学評論29(9) : 14-22.
- 戸所 隆 1983. 中心商店街の二つの形態—立体化の視点から—, 人文地理35(4) : 1-22.
- 松沢光雄 1965. 新宿繁華街の構造. 地理学評論38(4) : 38-47.
- 中村 豊・岡本耕平 1993. 『メンタルマップ入門』 古今書院
- 中村 豊 1978. 名古屋市の地理的空間とメンタルマップ. 地理学評論51(1) : 1-21
- Lynch, K.,(1960) : The Image of City, Cambridge, Mass. MIT Press. リンチ,K. (丹下健三・富田玲子訳. 1968『都市のイメージ』, 岩波書店
- 中小企業庁 2016. 『平成27年度商店街実態調査報告書』 中小企業庁
- 富山市 2018. 『平成29年度富山市歩行者通行量調査報告書概要版』 富山市

20